

やけのそよ風



No. 15

令和4年9月13日
大阪市立焼野小学校
校長 川辺 智久

共感呼んだ優勝監督の言葉



今夏の全国高校野球選手権大会で、東北勢の悲願だった全国制覇を成し遂げた仙台育英高校。「青春ってすごく密」という言葉を残した須江 航 監督の優勝インタビューは多くの人々の共感を呼びました。

須江監督は、2017年12月に発覚した部内の不祥事のあとに監督に就任し、まずは野球部組織の土台づくりに力を入れました。地域から応援されないような野球部では意味がないと考え、活動理念として掲げたのが「地域の皆さまと感動を分かち合う」でした。就任以降、野球部をあげて、地域への感謝の気持ちをこめ、清掃活動や雪かきなどの取り組みを続けています。2019年の秋に台風で学校周辺が大きな被害を受けた時も、部員たちは地域の人と一緒に汗を流しました。当時の野球部キャプテン 田中 祥都さんは、「田んぼとかには水がたまっていたり、車が通れない場所もあったりして大変だった。大好きな野球ができるのは周囲の皆さんの力もあるし、できることは何だろうと思って話し合っ(清掃活動を)やった。」。感謝とともに応援の声も耳にしたことで「喜んでもらえてうれしかった。自分たちもまたがんばろうと思えた」と語っています。

2011年の東日本大震災で、東北の多くの人たちがつらい経験をしてきました。また、夏の甲子園での優勝は、東北の人たちの悲願でした。優勝を祝うことばを掛けられた須江監督は、優勝インタビューの冒頭で、「宮城の皆さん、東北の皆さん、おめでとうございます。100年開かなかった扉が開いたので、多くの人の顔が浮かびました。」と述べました。監督自身、この優勝は自分たちだけのものではなく、宮城全体、東北全体のものだったと考えていることがうかがえます。自分たちは、多くの人たちのおかげで野球ができています。全国優勝することは、応援してくれている人たちや東北の人たちの思いをかなえ、恩返しすることなんだ、という気持ちで練習や試合に取り組んできた須江監督の思いが感じられます。

須江監督の思いは、仙台育英の選手たちだけではなく、全国の高校球児にも向けられていました。そのことを感じさせるのが、インタビューの締めくくりのことばです。「青春って、すごく密なので、でもそういうことは全部『だめだ、だめだ』と言われて、活動していても、どこかでストップがかかって、どこかでいつも止まってしまうような苦しい中で、でも本当に諦めないでやってくれたこと。…本当にすべての高校生の努力のたまものが、ただただ最後、僕たちがここに立ったというだけなので、ぜひ全国の高校生に拍手してもらえたらと思います。」

須江監督の言葉には、選手、全国の高校生、東北の人たちなど、いろいろな立場の人への「思いやり」が感じられます。須江監督は、現役時代にレギュラー選手になれず、一度も公式戦に出ることはありませんでした。須江監督自身が苦労人だからこそ、いろいろな人の立場、特に苦しんでいる人の立場でものごとを考え、配慮ある言葉をかけることができるのでしょう。

「思いやり」という言葉には、「相手のことを思う」という意味があります。相手や周りの人が置かれているその状況で、相手がどんな思いをしているか推し量るということです。それは、自分中心でなく、相手や周りの人の立場に立って考えるということですね。

本校の子どもたちも、家族の方々、地域の方々、学校の友達、教職員など、多くの人たちの温かい力添えがあってこそ、「やさしく、けんこうで、のびのびと」成長しています。子どもたちには、そんな周りの人たちへの感謝の心をもつとともに、お互い支え合って生きることの大切さを決して忘れないでほしいです。そして、相手の気持ちや立場を慮り、相手への思いを行動や言葉などの「形」にすることができる子どもたちに育ってほしいと思います。